

協議会ニュース

58号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1996.8



鳴く虫の観察

水野利彦(知多支部)

昆虫の中には音を出す(鳴く)ものも多く、変わったものではメンガタスズメという蛾やノコギリカミキリなどが、体節を擦り合わせてギーギーという音を出して人を驚かせます。また水生昆虫のミズムシの一種(マツモムシを小さくしてひっくり返したような昆虫)も水槽の中でジージーといいます。でも、これらは鳴くというよりも音を出すといった方がよいでしょう。鳴く虫といえば、セミやコオロギやキリギリスといったところが中心となるでしょう。

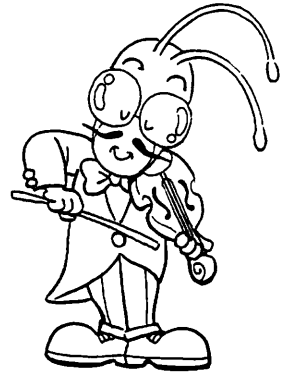
江戸時代から現在まで夏になると鳴く虫が店頭に並ぶほど、日本人は昔からコオロギやキリギリスの仲間に親しんできました。童謡「虫の声」や和歌の中にもたくさんの虫がでてくことは、日本人が虫の声にどれだけ親しんできたかを表しています。また、虫の声に風流を楽しむことができるのは日本人だけで、外国人にはこの音が雑音にしか聞こえないようです。

さて、コオロギやキリギリスの仲間は秋にしか鳴かないと思われがちですが、愛知県では春3月くらいから11月まで多くの種類の鳴く虫の声を聞くことができます。

春から順に季節を追っていきますと、一番早く声を出すのが成虫で冬を越したクビキリギスです。クビキリギスは鋭い口(顎)が血で染まったように赤く、噛みつくとき簡単には離れないことからその名前がついたといわれているキリギリスの仲間です。春の暖かい晩には、草むらの中からこの虫の「ジー」と連続したトランスが壊れたような鋭い声が聞こえてきます。水

銀灯の明かりに飛んできて鳴くことが結構ありますので、明るいところでこの声を聞いたなら探してみてください。声の場所がわかりにくい種類ですが、春にキリギリスの姿を見ることも結構感動するものです。

5月くらいになると、名古屋周辺や知多半島ではクビキリギスよりもう一回り声の大きいシブイロカヤキリモドキが鳴き始めます。この種は近年北上傾向にあるようです。とてもうるさく、いくら日本人でもこの音は雑音としか感じないでしょう。シバスズもこの時期に、シバの生えているような草丈の非常に低い草むらで「ジー」といった小さな連続した低音で鳴くようになります。



初夏の6月になると、湿地のイネ科植物の間から「リーー・リーー」という連続した高い声が聞こえるようになります。これは、キンヒバリという黄金色の小さなコオロギです。コオロギは一般に土の上に住んでいますが、キンヒバリやアオマツムシ・カンタンなどは草や木の上に住んでいます。土の上に住むコオロギは体の色が黒褐色ですが、草の上にいるものは緑の体色をしており、それぞれが保護色となっています。同じく湿地では、顔に白い線の入った中型のタンボコオロギの「ジャッ・ジャッ」という声や小型のヤチスズ・エソスズなどが聞こえるようになります。また、乾いた草原ではコガタコオロギの「ピーッ」という声や、あまり多くはありませんがナツノツツレサセコオロギ



の声も聞くことができます。森林の頭上からはヤブキリの「ジリ・ジリ・ジリ」とテンポの良い鳴き声を聞くこともできます。この時期には、秋に鳴くコオロギやキリギリスの幼虫が一齐に孵化を始め、あちらこちらで翅の生えていない小さな幼虫を見つけることができます。翅がない幼虫は当然鳴くことができません。

7月になって夏休みに入る頃になると、昼間の暑い草原でキリギリスが鳴き始めます。この声を聞くと、夏も本番だと感じます。それほど、暑さを誘う声です。

8月の盆を過ぎた頃から、初夏に孵化した幼虫たちが一齐に成虫になります。羽化したばかりのコオロギは長い後翅を持ったものが多く、

盛んに飛び回って分布拡大をはかります。そのため、灯火にも多くの個体が集まり、普段は深い草むらにすみ簡単には見つけることができないスズムシやミツカドコオロギを水銀灯の下で簡単に見ることができます。

鳴く虫たちは草原に住んでいるものと思いますが、実はいろいろな環境に棲み分けています。小型のキリギリスのササキリは5種類に分類されていますが、草原で普通に見られるのはホシササキリとウスイロササキリです。この両種も注意して見ていると、ホシササキリは明るい草原に、ウスイロササキリは荒れた感じの草原に棲み分けています。オナガササキリは早の産卵管が体長ほどもある変わった形をしていますが、この種は背の高い草原に住んでいます。コバネササキリは湿地に住んでいます。本当？のササキリは林縁のマント群落を生息地にしています。また、童謡に出てくるウマオイは、その鳴き声から正しくはハヤシノウマオイでありこの種は森林の周辺に生息しています。もう一種類のハタケノウマオイは、名前の通り草丈の低い草原に生息しています。



8月下旬からの夜の草原は鳴く虫の宝庫です。木がある地域では、頭上から雨のごとくアオマツムシの甲高い「リー・リー」という声が降ってきて他の虫の声はよく聞こえません。草だけの地域では、鳴く虫の王様カンタンや顔はゴツイが声はきれいなエンマコオロギなどを筆頭に、ミツカドコオロギ・ツツレサセコオロギ・スズムシなどや、あまり良い声ではないもののクツワムシやセスジツユムシも加わった鳴く虫の合唱が美しく聞こえてきます。河原の土手に腰を下ろし虫の声を聞いていると、何とも言えない良い気分になってきます。こんな良い声が雑音にしか聞こえない外国人はかわいそうだとも思ってしまう。近頃はアオマツムシの大きな声にかき消されてしまっていますが、木の上では「チンチン」という短い鳴き声のカネタキも聞こえてきます。この虫は翅が短く成虫になっても腹がほとんど見えているほどで、短い翅のため普通のコオロギほど長い鳴き方ができないのです。

虫の声は、繁殖のための情報伝達であることはご存知でしょう。実際に、同じ種類のコオロギが「呼び鳴き」「脅し鳴き」「連れ鳴き」などに聞き分けられる数種類の鳴き方をします。それは、集団を作る時や、メスに求愛するときなどのほか、夕方と明け方、初秋と晩秋など時間や時期によっても変わってきます。

10月にもなると、鳴く虫たちも年をとってきて？翅のヤスリも薄くなってきます。そのため、盛りの頃のような良い声が出なくなります。この頃の声を見ると、本当に「ものの哀れ」を感じてしまいます。夜の寒さが厳しくなり、縁の下からツツレサセコオロギの弱々しい声がかすかに聞こえるようになると、また冬がやってくるのです。



これからの自然観察会について

編集部

これまで自然観察会は、決まったやり方というものはなく、指導者個人個人のやり方でやられてきてきました。しかし、各地で多くの観察会が行われてくると、いろんな問題もでてくるようです。協議会の観察会に対する考え方も十分練れているわけではありませんが、支部、あるいは個人個人でやられている観察会についても皆で考える機会を設け、これまでの反省も踏まえながらよりよい観察会を行うために適切な提言などでできればと今回の研究会が計画されました。

研究会は、平成8年5月11日名古屋市教育館において開かれ、編集部も出席しましたのでその概要をお知らせします。

なお、紙面の都合上、内容を一部省略してあります。

当日の参加者は次のとおりです。

天野保幸（東三河支部）、水鳥富人（西三河支部）、降幡光宏（知多支部）、柴田美子（尾張支部）、篠田陽作（名古屋支部）、青木雅夫（名古屋支部）、佐藤国彦（事務局）、近藤盛英（編集部）

♡ ♡ ♡ ♡ ♡

【佐藤】始めに、協議会及び会員の行っている観察会の問題点について考えたいと思います。

問題点としては、①普及方法をうまくやる必要がある。②知識を増やすだけでなく、教え方、環境を見る目を広げるなど指導員の資質の向上を図る。③組織として観察会を行う場合には、一般にアピールできるような活動をしていく必要がある。④観察会のデータを蓄積していくなどがあげられます。

初めに「これからの自然観察会」ということで、今考えていることをお願い、その後、意

見交換をしたいと思います。

【天野】私は小学校の教員をしている関係から子供達をいかに自然に親しませるかについて心掛けています。2年生を担当しており生活科という科目があること、自然に恵まれたところであることから、子供達を常に外に連れ出すことを考えています。また、学校が数年前から環境教育に取り組み出しており、そのことも踏まえ、自然観察のあり方についての思いが私自身ありますので、それを少しお話しします。

小学校の子供たちを自然の中に連れていきますと実は見るだけでは収まらないんですね。どうしても手にとってみたいという気持ちがまず先にたってしまうんです。観察会の趣旨からいえばそれは大きく外れることかもしれませんが、環境教育の5つの理念のうちのひとつに幼年期に自然と十分ふれあう、自然との体験活動をさせるということが、成長していった自然のすばらしさというものをわかって、それが自然を大事にしよう、大切にしようという意欲に向いていくという考え方があります。そういうふうになると、小さい子供達にとって自然と親しむということは自然と一体になるということなんです。そのためには、そこにある草を採ってみたり、川に入って魚を捕ってみたり、虫を捕まえてみたり、そういう採集ということがどうしても避けて通れないものになってしまう。私自身、現在抱えている自然観察指導員としての立場と、理科の教師としての立場とのギャップですね。これが悩みのひとつになっています。むやみやたらと自然のものを採集することは決してよいことではないことはわかっていますが、自然の中では比較的強い立場にあるような雑草とか、比較的生活力の強い生き物については、

採集するということが許されていいのではないか、そしてそうした経験を積んだ子供達が将来大きくなって、自分たちが子供のときにこんな経験ができた、ところが今はできないというようになれば当然自然の変化というものに目を向いていくだろうし、それがひいては自然保護のひとつの道になっていくのではないかと考えています。

また、親子対象の観察会で困ってしまうのが、私たちはまず最初に今日の観察会はじっくりながめるんだよということを言うわけ



す。ところが、親の中には、特にこれが夏休みの初めとか、そういう時期でありますよね、夏休みの宿題の一環にしてしまおうという考えがあるんですよね。ですから、観察会にきて変わったものが見つかるとうどんどん採っちゃうんです。それを止めて下さい、ちょっと遠慮して下さいと言うと隠れて採るんですよね。そんなこともあって、こういうものなら採ってもいいんだよ、こういうものは貴重なものだから採ることを遠慮してほしいですよ、というふうに区別して、その範囲で採ることによって自然をしっかりと見てもらうという場があってもいいのではないかとということを強く感じています。

それから、現在私たち東三河支部の観察会をみても参加者の年齢構成は50歳以上の方が多くいんですね。こんな言い方をしては失礼なんですけど、より若い人達に自然に親しんでもらい、その中から自然の大切さを体感してもらって、自然保護という方向に目を向けてもらうことが将来的にみて有効ではないかなとも思います。そのためには、それが最小限または自然の回復力に任せれる範囲の中であれば、採集については、多少のことは目をつむってでもいいのではと感じています。それをいかに自然観察の中に取り入れていくかということを私は個人的に考えていきたいというふうに、今思っていま

す。

【水鳥】私は高校の生物の教員で、現在豊田市にある高校に勤務していますけれども、西三河の観察会の世話人になっています。自然観察会について思っていることですが、10年前、発足当時から5～6年は、ずっと熱心に、一度参加した人にまた葉書を出して、翌年とか次回の案内とかいうことを熱心にやっていたんですけれども、近頃は僕自身仕事が忙しくなったりして、なかなか自分の時間が設けられなくなってきました。それで、なんとか西三河の観察会をみんなで手分けして、簡素化して盛り上げていきたいなということを常々思っているところです。

これまでの経験を通して言うと、天野さんの方から指摘のあったように、いろんな年齢層の人がいらっしゃるんですけれども、年配の人が毎回出てくるというような傾向があって、10何年か前に自然観察指導員の講習会に出て青柳先生から、自然観察会の目的は100年かかる。子供達に教えて、子供達が大人になって、その自分の子供に自然観察が教えられたら一番いい形になっていくということで、本当に新鮮な子供達の目に自然の大切さ、自然の豊かさ、ありがたさを教えられたらなあと思ってきました。それが、おじいちゃん、おばあちゃんを対象にというようなことになって、なかなかむずかしいなあと感じます。時たま家族連れで小さいお子さんを連れていらっしゃる方には、子供達におもしろくさせてあげようかなと思っているところなんですけれども、会としてそのような対応が今まで十分なされてきたかという疑問だなあと思います。いろんな意味で西三河の自然観察会のあり方を考え直さなきゃいけないところというふうに思っています。

佐藤さんが先程いろんな問題点を指摘されたように、普及方法も西三河支部では問題はあるし、名簿には会員60名くらいいるのですけれども、出てくるのは10名そこそこ。毎回忘年会を開いているような感じで、顔ぶれが決まっ

てしまっているということや、指導員の資質向上についても問題点がある。それから、データを残していくということにも問題点があるということで、こういう問題点を会員全員の人が問題意識を持っていないことに最大の問題があるのではないかと考えている次第です。

【降幡】知多の観察会も70名くらいの指導員いるのですが出るのは15から20名くらいですかね。同じような状態です。

知多の観察会は、82年の5月に始まって、10年間やったことのまとめを92年の4月に作りました。内容は会員の推移とどんな観察会をやったかという、今まであった印刷物を印刷して本にしただけのものですけど、その時に会員が15名くらい集まり宿泊してやったんですが、その時の反省で、毎年活動した記録がないのではないかと、それはよくないということで、誰かやる人はいないかということで、名古屋市へお勤めの榊原靖さんが中心になって、92年版から毎年まとめを作っていくことになりました。これはただやった記録だけですけれども、去年あたりから、これに感想をちょっとづつ入れています。

そういうふうにもとめてきたんですが、いわゆる一般対象の観察会は非常に少なくて、研修会という聞こえがいいんですが、まあ自分達が遊ぶという会で、夜の会と昼の会と両方やっていたんです。それもいいんですが、もうちょっと地元で根付いた観察会をやる必要があるんじゃないかということで、自分の住んでいる各市町村でやれるだけやってみようじゃないかということになりました。まあ、観察会の内容はそう高度なことでなくて、一緒にぶらぶら歩くという程度でいいんじゃないかということで、今年から知多市とそれから東浦町、東浦というのは僕自身勤めていた町で過去3年間ずっとやってたもので、町のほうの広報も、年間予定を渡しておく、自動的に広報に載せてくれるということもやってくれまして、非常に協力的だったものです。町の広報に観察会の行事の様子

を写真付きで記事として1年に1回くらい載せてもくれるんですから、うまく市町村と提携しています。武豊のほうは独自に既に会員の人がやってくれているので、形がひとつできちゃってるんです。それで、行事の日程の調整ですけども、知多全体の予定表を極力各市町村重ならないように調整をして作ってあります。なぜこういうことをやったかと一般方式の観察会をやる場合に、指導員が一人だけというのは問題があるもんですから。少なくとも2人か3人はいないといかん。そう危険なことをするわけではないんですが、ひょっとして何かあればまずいじゃないかなということで、必ず2人は出る形をとっています。

保険のほうも、1回に付き50円をいただくという形でちらしにも注意事項だとか保険のことも触れてお願いしています。そういうふうで今年会員全員に年間予定を配った。これは県の行事と知多の各市町村の行事を一覧表にしてあります。市町村別に並べたものと、期日順に並べたものがあります。

各市町村の後援依頼は、県の協議会の規約を添付してまして、協議会会長の大竹さんの名前で申請を出して、許可がおりてます。そういうことで若干今までの形とちょっと違う形で今年動き出したんですが、まあどうなるかわからないんですが、手探りといいますかね、そんな感じで数だけはやろうと参加者数は別に気にしない、人数がいくら少なくとも気にしないでやろうじゃないかということで始めたところです。

【柴田】私は、一応協議会主催と支部主催の観察会にずっと出てきたんですが、随分内容が違うので混同するといけませんので、最初に協議会主催のいわゆる一般の人を対象とする観察会に参加させていただいたときに思ったことですが、まず参加者が植物の名前をすごく聞くことに驚きました。観察会というのは、植物の名前とか動物だとか昆虫の名前を教えてくれるところなのかというくらいにびっくりしたんです。それに対して指導員の方も一々なにになにですと

というような観察会なんです、管理された公園などでもどのように管理されているのかということ、自然観察指導員であれば絶えず見ていく必要があるんじゃないか、そうすればまったくその時々で観察して回って終わるより発展性があるんじゃないかと感じました。もちろん四季おりおりありますから見ていけばそれなりに楽しいと思いますが、ただ楽しいだけで終わっていいのかなという気がしました。

あと、最初に佐藤さんのほうから、これまでの観察会についての経過報告の中で、いろいろ問題点がでていたんですが、そうした問題点は今日お話ししたいなと思っていたんですが、報告があったのではぶかさせていただきます。

私はいろんな観察会があっていいと思いますが、私個人としてはこれからの観察会は、個性的な観察会が求められる時代でないかと、ちょっと先走った言い方ですが、そういうものでないとマンネリ化は避けられないんじゃないかと思いました。

それから個人としては、単に見て回る観察会よりは、愛知県でしかできないというのがあると思います。例えば、このあたりの湿地は他県ではできない観察会だと思いますから、そういうところの自然をちょっと重点的に調べたり、そのデータをとったり、いろんなことをやっていきたいなということを、どこまでできるかわかりませんが、思っています。まったくの初心者で言いたいことを言って申し訳ありませんが以上です。

【篠田】名古屋支部の場合は、支部主催の観察会は春と秋の年2回、お彼岸のときに、猪高緑地でやる観察会です。ただ、名古屋支部の観察会はみなさんご存じのように、個々に行っている月例観察会はたくさんあるところでして、それについては個々にやってみえる方々の裁量の中で、それなりに方向性なり目的なりをもって行われていると思います。

私の自然観察会についての基本的な考え方ですが、年に何回かの大きい協議会としての観察

会とか、各支部の主催の観察会というのはイベント的な要素の強い観察会に該当するかと思います。これについては、あまりむずかしいことを言わなくて、観察会に行ったことのない人たち、観察会というものを知らない人たちに観察会があることを知ってもらうための観察会として割り切ってしまったほうが、運営するのにはいいんじゃないか、こういうものがあるんだよ、行くと結構楽しいんだよというのがわかるための観察会というように内容を決めてしまえば、企画のたてかたも各支部共通でも全国共通でも全部いけるんじゃないかという気がするんですね。それから、それによる広報の仕方、普及の仕方とかいろいろあるんですが、観察会のあること、自然に親しむことのできる場所があるというのを知らせるためだけだと目的を絞れば、広報の仕方もかなり絞られてくる。その観察会があってその次に初めて定期的な観察会についてというような考えが出てくるんじゃないかと思います。

観察会でアンケートをとると、こんな観察会は毎月どこかでやっているんですかとか、どこへ行けば観察会に出れますかというのが必ずあります。それに応えるのが各場所での定例の月例観察会だと思うんですね。そんな方たちにはお住まいはどちらですか、それでしたらこの近所にこういう観察会がありますからそちらにお出掛けくださいという案内をする。そうすることによって、今まで観察会を知らなかった人がイベント的な観察会で知って、それが定期的なお客様として観察会に出てきてもらえるという順番でこういうのが組み立てられていくというふうにですね。その定期的な観察会というのが月例の観察会であり、各地域で行われるものですからなるべく身近な所であったほうがいい、数もたくさんあったほうがいいということです。

そういう意味でこの定期的な観察会を位置付けてくると、身近なところで毎月毎月くるとなると新鮮味がなくなってきます。逆に言えば飽

きてくるという感じがあると思うんですが。それはあくまで先程柴田さんが言われたように花を見たり鳥を見たりというだけの観察会では飽きてくるんですが、その中で、月例観察会は観察会と言う名前の『文化活動』だと思っています。観察会というのは、ひとつの文化活動であり、地域のコミュニティのひとつの文化活動だという考えでやっていけば、僕はかなり人を集めることもできるし、参加者が飽きることもない。それから、自然のことについてはここに行けば情報が聞けるんだよ、ここに2年も通うとちょっと飽きてきて、ほかに観察会ってありますかって聞かれたら、それはまだ隣の区のおそこへ行けばやってますからと、というような案内ができるというようなネットワーク的な働きを出していきたい。情報発信基地というか、そういうことで有機的につながりを持っていくと、全部の観察会のお客さんが順番に回っていくという可能性もあるし、飽きもこないということですね。

具体的には、まず毎日の新聞やテレビなど多くの情報の中から、参加者の興味を持ちそうな話題をピックアップして観察会のなかで取り上げていくことです。多自然型工法、ビオトープ、酸性雨、親水公園、近自然工法など。

今年のように冬の時期の小雨と例年にない寒さなどによるタケノコ等の不作、野鳥の少ない原因、シデコブシの花が少ない、透水性の舗装の必要性、最近慢性的になりつつある夏場の渇水の原因、雑草や帰化植物の増えていくメカニズム、地球環境問題としての温暖化、オゾンホールやフロンなどの話題、紫外線の増加による動植物への影響、農薬や化学物質による水や土壌の汚染による自然への影響などの問題を身近な自然観察会の中でわかりやすく取り上げていけば毎回同じ場所で、同じ自然でも参加者はその度に新しい発見をすることができると思います。このあたりが先に述べた観察会は『情報発信基地であり文化活動』の意味するところだと思います。このような方向性を持たずに、イベント

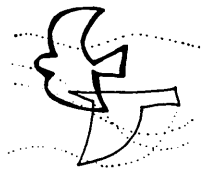
的な発想だけでただ自然は素晴らしい、自然に親しもうだけでは参加者はすぐに飽きてしまいますから、次第に参加者は減っていきます。現在自然観察会に参加する人たちはかなり高い自然保護意識を持っています。遠足やハイキング気分の観察会はすぐに見捨てられます。やはり問題意識を持って行動することが大切ではないでしょうか。それを忘れて花を見ましょう。鳥を見ましょう、自然は素敵ですね、だけでは駄目だと思います。

観察会では、参加者の関心をつなぎとめるために、山野草のテンプラを食べよう、キノコ汁を食べよう、ドングリのクッキーを食べようなど、人集めの企画に走ります。しかし、このような企画に喜んで毎回参加する人々の多くは今流行のアウトドア志向で、自然保護や自然を大切にしようと思っている人々とは違うような気がします。その結果、あの自然観察会は自然を荒らしては困るなどの苦情を地元からいただくことになります。自然観察会はいくまでも自然を守り、理解し、そして自然との良い関係を保っていくのが本来の使命だということを忘れないでいたいと思います。

【佐藤】これまで各支部から一人づつご意見をいただきました。お話の中には、いくつかの問題があったかと思っています。まとめてみま

すと、採集の問題、参加者の年齢の問題、指導員の問題意識、地元に着すること、観察指導方法のあり方、それは個性を生かすということ、問題意識を持つということ、文化活動としてということ、親しむということもあったかと思いますが、ゲームの問題もありました。観察会の運営のパターン化の問題もありました。これらについて、ひとつずつ、意見交換をしたいと思っています。まず名前を教えること、採集の問題についてはどうでしょうか。

【篠田】採集の問題については、観察会では採



ってはいけないということは迷信であって、採ることが全てに許されるわけではないが、どのように採って、どう利用するかという採り方を問題にすべきではないか。

【佐藤】採集ということは自然を利用することですから、これは開発などにもつながる問題といえます。ですから、たくさんあるから採って良いというだけでなく、利用する自然をいかに有効に活用するかという視点でも考える必要があります。例えば、学校の宿題で昆虫標本づくりがすべて悪いわけではなく、対象となる昆虫と環境とのつながりを考えて集めるとか、出来上がった標本を後でどのように授業などで生かすかによって採集が生きてくると思います。また、観察会でも、ただ、採集禁止というのではなく、今日はこういうことだから採集しないようにしますなどと理由を伝えないと意味がないのではないのでしょうか。自分で採集の可否を考えることが自然保護の問題を考えることにつながるように思います。

【降幡】参加者に高齢者は確かに増えてきたね。でも、高齢者でも自然についてまじめに考える人もいるし、自然保護で活躍する人もいるので大切にすべきではないだろう。

【篠田】子供に教えれば次の世代は大丈夫というのも迷信です。それぞれの世代に伝えるべきものはあるし、いろいろな年齢層に合わせた観察会が大切だと思う。

【佐藤】指導員の問題意識については、今日の研究会の参加者が少ないのをみてもわかります。協議会でアンケートなどしても返事のくるのは大体2割くらいです。活動はできなくても、反応もないのは寂しいものですね。

【青木】観察会で指導することに自信がないから出てこないのだろうか。講習会に出るときは、指導員になろうという気は少しはあるはずなのだが。

【篠田】確かに観察会で指導するとなると大変だ。けれども、リーダーシップが発揮できないのは問題があるし、そのための研修会も必要だ

ろう。また、講習会自体にも問題があり、申し込みをする時とか、受講後にも何か条件のようなものをつけないといけないかもしれない。

【佐藤】すべての会員に観察会の指導者になれるとは事務局としては考えてないけど、観察会のお手伝いとか、あるいは他に自然を大切にしようという普及事業や調査など、何か得意なことで協力してもらえるとありがたいと考えています。

【篠田】地元に着るといことは大事なことだろう。定例観察会がうまくいくかどうかはこれで決まるといい。

【降幡】よその市町村の人に来てもらわなくても、その市町村の中でやっていくほうがいい。

【篠田】やはり下駄履きで出かけるというか、普通の身の回りにあるということが大事なことです。自分の身の回りの自然を大切にできなくて、日本全体の自然をどうのこうのいう話なんではね。

【降幡】地元こんな素晴らしい自然があるということがわかってくれればそれでいいんじゃないかということで。ただ、指導員の体制が、市町村だけで間に合わない場合があることから、1人足らんとか2人足らんとか、3人4人出してくれば一番いいんですが、たいがい今年の場合は指導員は4人か5人は出てるんですがね。

それと、県委託の観察会やシリーズ観察会のPRも新聞に出ていなかったように思うし、チラシがどのように配布されているかわかりません。普及についてもっと考える必要があるのではないかな。

【佐藤】PRのネットワークをつくる必要があると最近思っています。例えば、僕がチラシを貰えば森林公園に頼んで置くことはできる。そのように、チラシを作ったら、どの人はどくへ持っていくというのを決めておいて、そこへ送るというのはどうでしょうか。広報担当と決めて、その人が愛知県中に全部置いてくるわけにはいかないんだから。だから各支部でこの人に頼めばどこの役場に置けるとかね、そういう

のをつくるという思うんです。そういう努力を続けていくということですか。

次に、ひとつ問題点として、あんまり同好会的になってしまって、新しい人が入りにくい雰囲気になってしまうということについてはどうですか。

【篠田】それは運営側の姿勢の問題で、自分たちは観察会をやってるんでなくて、自分たちの観察会にきてもらっているんだという気持ちさえあればそういうことになり得ないんだよね。今日は観察会に来ていただきましてありがとうございますというように、最後に頭をさげられるような観察会をやってりゃ同好会的になりようがないんだよね。

【青木】だからそこらへんが問題意識なんですよ。指導員の問題意識がそういうところにあれば問題ないんですが、どうもそこらへんはないということが先程言ってたことなんですね。

【柴田】だからその会のところで何か共通の話題を出して、どうですかということからでも参加しているという意識ができてくると思うんですよ。

【篠田】あと指導員の接し方で、自分が常に解説してるという形になっちゃうとまずいですよね。簡単な例で言うとサクラの話をしていて、今年のサクラはだいぶ遅れてやっと咲きはじめましたよねえ、お宅の近所のサクラ咲いてますかて聞くんですよ。

うちの近所の公園まだなんだよとか、もう一人の人がうちの庭はもう満開になりましたよ、南向きですからというようにそういう話を観察会の中でしていくと、もうそれは観察会でなくて文化活動のようなもので、そこに来ればいろんな話ができるよという形になって、だからこれは指導員の問題になるんですよ。

【青木】だから指導員の教育に問題があると思うんです。やっぱり、新しい人はお客さん意識

というか、よそ者意識があるんです。遠慮しながら後のほうにくっついていくというのが大半なんです。僕らでも、そこらへんは自分が体験して気付いているものですから、新しい人にできるだけ言葉をかけてやるし、いろんなものを前に呼び出して見せてやるということをやっています。

【佐藤】新しい人は案外素朴な質問が多いんですよ。それを丁寧に何回聞かれても教えてあげることも大切でしょう。

【青木】ベテランの人にそんな初歩的なことをいいかしらと思うんですけどね。

【柴田】そうなんです。それで第一印象みたいのがあって、聞くとふふんというように言われるともうだめなんですよ。もう次は聞けない雰囲気というか。

【佐藤】注意したいのは、観察会の時には、これはコバだなとかこれはミヤマだなというように、全部フルネーム言わないでしょ。コバノミツバツツジだなというように。長くても観察会ではフルネームで言いたいと思います。

【柴田】略されると、何を言っているのかよくわからないというのがあるし、何かそちらだけで話が進んで、なかなか入っていけないという感じになる。

【青木】指導員の教育体制をもっともっと充実していただかないと。

【佐藤】事務局としてはこれからいろいろ企画していこうと思っています。

次に、自然観察の指導方法のあり方ではどうですか。

【青木】ゲームについてですが、ゲーム性というものを観察会に取り入れることは個人的にはあんまり好きじゃないんですが、そのへん篠田さんのご意見を伺いたいんですが。

【篠田】ゲームというものは全面否定してもどうしようもないことだし、そうかと言ってそれだけやって喜んで帰ってもらっても芸がなさすぎる。ネーチャーゲームというのは、教育制度で言うと幼稚園だと思うんです。自然観察とい



うのは小中学校の義務教育。幼稚園では知育でなくて感覚教育なんですよ。ネーチャーゲームというのは自然に親しむための感覚的なものを学ぶ、それから知識とか知育の方に入っていく。両方あってワンセットと考える。だから使い方の問題なんです。

ゲームはゲームのやり方さえ知っていればできるんですよ。それで2時間の自然観察の間の1時間とればそんな楽なことはないからどんどんこちらに走ってくる。だから、それをひっくり返して考えるとネーチャーゲームで自然のことを教えようと思ったら、自然観察で必要なことを教えるよりもっと大変なんです、本当は。もっとたくさんの自然にたいする情報とか知識とか感覚をもてないと、ネーチャーゲームで自然をわからせるということは大変な仕事なんですよ。

【柴田】ある会で今度子供対象の観察会をやるんだけどという話し合いの場で、ネーチャーゲームというのが出て、もっと自然のものに親しんだり、じっくり観察するということを提案したんですけども、むしろゲームをやった方がいいということになっちゃったんですよ。

【篠田】そのへんがやっぱり本当に自然を理解したり、保護していくために行う観察会であるのか、観察会で楽しむという観察会なのかの違いがでてくるわけです。

【佐藤】最近よくやるゲームはどういうものですか。

【篠田】拾っておいでというのです。僕がバンダナの中へ隠しておいたものを、1年生に20秒くらい見せます。これと同じものを拾っておいでと。4～5年生になるとそれが4種類か5種類に増えるんです。

また、自然の中にもないものを拾っておいでという観察会もやります。だから、自然の中にもないものというごみしかないんですよ。ビンゴゲームもよく使われますが、ビンゴとしてやるのではなくて、このシーズンにはこれだけは見てほしいというものの表を作っておくなど工

夫してやります。

【降幡】観察会の一番最初にカモフラージュ、あれは相当効果があるね。カモフラージュを最初にやってから観察をやるということは、非常に視覚をとぎすますというか、そういう作用は確かにある。それとね、フィールドビンゴとか宝物、それから篠田さんの言った同じものを探そうというのですかね。

【天野】私は、今言われたように、ビンゴをやったり、同じものを探そうというのをやったり、いろんな状況を出しておいて、それにあてはまるものを探させたりとか、そんなことは取り入れることができますけど、毎回ではないですね。要するに時間を持て余しそうになってしまうとやっぱりそういうのを使うというようになっていきますね。

【降幡】使う場所と使い方とあとの分かち合いというか、どれだけ興味を持って、子供たちに話をさせるかだね。夢中になるくらい話が出てきますから。自然に対する知識があって、ゲームを利用することが大切です。

【篠田】この前もネーチャーゲームの例会があって見に行ったんですが、やっぱりカモフラージュをやるんですがね。やるのは構わないんですが、カモフラージュをやっている場所が、ムラサキケマンだとかツボスミレだとかカンアオイだとかがある落ち葉の上を踏み散らしてやるんですよ、何をやっているんだと怒りたくなりますよ。

【柴田】それと、もうひとつお土産に木で作った鉛筆を出しましょうということで一生懸命作るんですよ。そういうことに対して何かどうなのかなと思うんですよ。

【篠田】テンプラやったり、キノコ汁やったりして呼ばなきゃ人がこない、お土産を渡すというその考えがちょっとね。そういうところが過ぎないように自分たちの観察会のやり方についても反省してもらわないとだめなんですよ。



逆に、もので人を集めようとする、ますます自然観察会が自然破壊になっていくとか逆の方向になっちゃう心配があるね。

ゲームで効果が出るほどの自然の理解のある人は少ないと思うんです。そんな人は自然観察指導員でぴかいちだと思うんです。ゲームをやってみみんなに自然の大切さを体験させれるような人はね。

【青木】だからすごくむずかしいものね。単なる遊びに終わってしまう危険性が大いといは思うんだがね。僕はネーチャーゲームは否定はしないけれども、やはりしょせんゲームだよということを、最初からやる人が心得てやるべきだと思う。

【降幡】導入的な場合とか変化を持たせる時とかそういう使い方をしていかないと、ゲームが主というのでは、やはり観察会としてはあまり取り入れるべきものではない。

【篠田】全体の中でやっぱり2時間の観察会があったら、10分か15分までしか時間は割かない覚悟でやる、それ以上ということになると無駄ということになっちゃう。むずかしいよ。

【柴田】観察会が何かサービスしてるっていう感じ、どこまでサービスするのか、もっと本当に理解する人だったら来ると思うんですよね。お土産付き、サービス付きで至れり尽くせり、しかも子供だと何か子守の会かなということまで思ってしまったんですよね。

【佐藤】指導内容もそうなんですよね。参加者がおもしろがること、不思議がることをやることも多いね。

【篠田】自然観察会は自然観察会としてのゲームがあるというのが僕の持論なんです。ネーチャーゲームを取り入れなくても、自分たちのゲームを考えて作っていくのが一番いい方法だと思うんです。参考にはしてもいいけれど。

【柴田】そうそう。個人によってそれなりのやり方でやっていけばいいという。

【佐藤】ゲームはそのくらいにして、あとはよろしいですか。

【青木】個性をいかすの問題

意識を持つというのは共通点があると思うんですが、やはり個性は出てくると思うんです。



開催する場所によって。それが地元密着と同じだと思うんですけどね。だから個性をいかすのは非常に大事だと思うし、それから僕はまあ、名古屋の各所でやってる観察会でそう思ったんですけど、やっぱり観察記録、篠田さんところは別ですよ、ちゃんとして残してないというのはもったいないと言うのか、もう少し、文化的な意味から考えるとですね、残すべきだと思うんですね、そこらへんが各地元のデータとして生きてくると思うんですね。だからどんなにつまらないところで、それなりに問題点はあると思うんです。僕は今後の観察会というのは、とにかくちゃんとした記録を、しかも、個性をいかすというのはその地域の特性をいかしたもので、年間を通じてあるいはもっと長いサイクルの記録を残していくというのは非常に大事なことじゃないかな。僕は自分のところで、ここ2〜3年くらいやってみて、すごく気が付いたことがいろいろでてきたものですから、他の観察会に参加しても報告書は読ませていただいているんですけども、あの程度じゃなくって、もうちょっとこう、毎月指標のものを決めておいて、そうしたものの記録を残していくということをやるとか、テーマごとに責任者を決めてやると、すごく充実するというのか。そうなってくると、なかなか小さい子供さんたちを指導していくという部分がむずかしくなってくるかもしれないけど、それはそれとしてね、やっぱりやるべきだなあということをするごく最近感じるようになったんです。

【柴田】だから会が何かひとつ目的を持てば、それに沿って記録を残していくことができる。ただ何を見たというデータだけでなく、その変わっていった、何かによって変化していったものをね。それを積み重ねていくということ、は、会自身もそういうものにねらいを持ってい

かないといけないことになる。観察会自身が目的意識を持っていれば、当然それが結果として出てくるわけだが、目的意識を持ってなくてやってくるから、そんなものはじゃまくさいとかめんどくさいになっちゃう。

【青木】自然観察というのは範囲が広いからむずかしい部分があるんですが、僕は基本的には自然観察の一番大事なことというのは定点観測だと思うんですね。広い意味で考えれば、ずっと見続けることが自然保護につながっていくと思うんですよ。

【柴田】それと、そういう場合、説明者が1人で受け持ってしまうと大変で長続きしないから、サブリーダーか何か2〜3人でやっていけば長続きするんじゃないかという気がしますね。

【青木】問題意識を持った人が多いほどいいわけですから。

【佐藤】一番むずかしいのは新しいものを見つけるのは簡単なんだよね。ところが、今まで見てたのがなくなった時に、いつ何がなくなったのか、把握できないのでは。

【青木】だから平凡なものでもずっと続けてるところに変化がでてくるわけですから。トピックスばかりでやっているといきずまってしまう。

【篠田】だから、何を見つけたというのもそうなんですけど、去年見れたものが今年は見えないというのが大切なんですよ。報告が残っていくということは、去年見れたものが今年は見えない、その次の年になっても見れないということになれば、もうこれはだめだろうということになってきます。そういうことぐらいだろうね。

【近藤】記録とってやっていくことはいいことだと思うんですが、ただ、初めからやるものを決めておいて、これとこれとこれだけについて毎年観測をやっていこうというならわかりますが、実際には今年はこうだったけど、あれ去年どうだったかなということになりかねない。す

べての生物について、それを記録するということは、短時間の間に、しかも月に1回では不可能ですね。だから、そのへんが何のために何をどこまで記録するのかというのは、やはり目的をしっかり持つ必要があると思いますね。今言ってみえたようにごくごく普通に平凡にやったものを記録する、僕はそれでもいいと思うんですが、それがその地点の、何と言うのかな、公害で言えば常時監視結果のようなもので、記録を残していくことによって、地域の自然の変化、様子がわかってくる、5年、10年、20年と続けば、すべての記録がなくてもものが言えるのではないかと思います。ただ、なかなかそれで話をしようとするにはむずかしいと思いますが。

【篠田】だから、そのへんのところが、どこまでやれる能力があるか、スタッフの力にもよるでしょう。大高の場合は、植物については岩崎さんにコンピュータに打ち込んでもらって、みんなチェックできるようになっている。去年から山田先生に昆虫をやってもらって、去年見れた昆虫、今年見れた昆虫をずっと入れてもらっているように手分けしてやっている。これは記録としては毎年チェックがやれる。ただし、月に1回の観察会だから限度はあります。

【近藤】月1回、毎月第2の日曜日としても、1週間違えば時期によってだいぶ違いますよね。そうするとむずかしくなる。

【篠田】それをフォローするためには、毎月同じ日を決めて、だれかが見に行くかということになると観察会の範囲を越えてしまう。

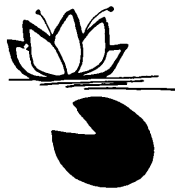
【佐藤】次に、親しむということについてはどうですか。

【篠田】子供たちの観察会については親しむことを中心にやっていかないとというのがある。

【水鳥】出発点が親しむことから始まってということ。

【篠田】でも、いつまでも親しんでいてもだめだよと。むづかしいなあそのへんが。

【水鳥】本当は親しんで、参加者全員が楽しん



でやるというのが一番、責任をなすりつけられていやいややっているというのはだめだね。みんなが参加してきて楽しい会というのが前提で。

【天野】指導員の中にもありますよね。出るのはいいけど仕事を与えられるからいやだというのが。

【篠田】私が自然を楽しむために指導員になったのあって、苦労して人に教えるために指導員になったのではないという理論もあるもんね。

【水鳥】指導方法のあり方で、さっき柴田さんが言っておられたことですが、

詳しい人はずっとしゃべりっぱなしでいろんなことを説明できる。ひとつの植物で何時

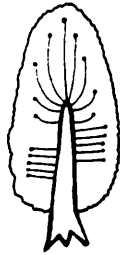
間でも話のできるような人もいますけれども、そういうリーダーのグループに入った人はそれなりの体験をするけど、僕など話のネタもないものですから、あぁいいですねとか、一緒に発見するような形になってしまう。だから、僕なんかいいところないけども持ち味で参加者がそれなりにじっくりと耳をそばだてることができたとか、見れたとか、木のはだに触ることができたとか、そういう何か持ち帰ってもらえればいいんじゃないかと思ってやっています。

【降幡】知識とか勉強ではないからね。

【佐藤】まず第一に新人には自分のやり方を覚えてもらうことが大切だね。私はこれについては得意だよということを作ってもらって、それができた上で幅を広げていってもらおうことでしょね。

【青木】知識を教えなくても自分の見方、感じ方を伝えることでね。そこらへんが僕個性だと思うんですね。

後で終ってみて、あの人でよかったというのが結構あるんですよ。だから、知識があまりなくても結構いけるもんですよ。だから、自分が感動すればいいと思うですね。すごいと思うその感動がうまく伝えられれば、そういう技術があればね、そんなに知識がなくても、僕なん



かもいつもやっててずるいから、わからんとよく観察して覚えていてメモとっというのと、ここどうだったと意地悪くむこうがメモをもらしたようなところを指摘してやったりして、で、ガイドステーションも持っていった一緒に資料を調べるとか、ほかの詳しくそうな人を呼んできて聞くとかですね、一緒に覚えるスタイルをとるんです。それで結構喜ぶんですよ。

【水鳥】指導者が手探りをするパターンを参加者が学んでいくということが大切だということですね。

【天野】植物なんか、名前を知りたいがる人はたくさんいるんだけど、調べ方ね、図鑑は持っていないでも図鑑の引き方がわからんと言われるんですよ。

だから、引き方を一緒にやってあげればいいと思うんですね。ぱっと答えてしまうのは簡単かもしれないけども、それだと聞いてもすぐ忘れてちゃうんですよ、自分が苦労して引いたりして覚えたものは忘れないんですよ。

ところが、参加者の中にはそのものを知りたいがるという人がすごく多いんですよ。ものの名前を知るということも自然観察に親しむひとつの方法なんです。だけど、正式の名前を知らなくてもいいんですよ。ある特徴を見つけて自分で名前を付けてもいいんですよ。ただ、自分で付けた名前は自分にしか通じない。だから、一般の人達にも通じるものとして正式和名を、ある機会に覚えることができるわけですよ。僕はそれでいいと思うんですけどね。だけど、どうしても、正式和名、多くの人は学名といってますが、それを知りたいがるんですよ。知ると同時になぜそうした名前が付いたと名前の由来まで聞いてくるんですよ。

【柴田】名前を知ることとはね、自然への関心的手段だと思うんですね。目的でないんですよ。知ることに重点がいつてしまっている。たまたま私がいった観察会がそうかもしれないけれども、指導員自身も一般の人たちにそうしたイメージを与えているんじゃないか。そうで

ない観察会に一度参加したことがあるんです、その指導員の方が竹林に連れて行って、この竹林をみて何を感じますかとグループの人に聞くんです。そしてひとりずつどう思ったか答えるんです。最後にこの方が聞いた話をまとめて、ここは昔畑だった。地形をもう一度見てくださーいということ言われて、昔畑だったところを耕さなくなったから竹林が増えてしまった。そういう話を後で教えてくださるというふうにずっと行ったんです。その方はいわゆるあれもこれもと言うのではなく、3つくらいしかポイントを言わなかったんです。随分まわったんですが、途中で参加者の一人が、あっこれなんとかいう木ですねということ言われたんですよ。そしたら、その方がね、自然観察会は名前を覚える会ではないと、自然に親しんで楽しんでくださいということをびしゃりと言われてね、ああこういう観察会もあるんかと、その時私すごく感動したんですね。その方は名前も言われなし、説明もされなかったんですが、もちろん植物についても、何についてもすごく詳しい、よく知ってらっしゃるんですが言われないんですよ。

【佐藤】子供相手にする場合特にそうだけど、早めに自分のベースに引っ張り込むというのが大事ですね。だから、最初に観察会が始まったと同時に名前のことを聞かれ答えると、そういう会になっていってしまう。

では、今までのご意見は反省が多かったんですが、協議会としても反省して、いろいろまた考えていきたいと思います。今日の議題でありますこれからの観察会ということでは、何かありませんか。

【篠田】今一番問題になっている環境教育がらみの問題を取り入れたというか、取り組んだ観察会が、これからは観察会の中で重要なウエイトを占めていくと思うから、そのへんの勉強を

どんどんしていかないと。

行政のほうの依頼も半分以上はそのへんにねらいがある観察会を依頼してくるんですよ。それに応えるだけの準備をこちらしておかないとこれからはだめになるかなという気がする【佐藤】依頼する市町村が観察会というものをだんだん知ってくると、こういう観察会をやってほしいという目的をもったものが多くなってくると思うんです。環境教育などを含めて、自然観察からどう広げていくか。

【降幡】環境教育というのは学校でも手を焼いてる面があるでね。学校の環境教育の手始めというのはごみ拾いなんだね。そのために2時間3時間集めてグループ化して、外でやることだから事故があっちゃいかんということだね。どこへ集めて、集めたのをどういうふうに持っていくとかね。そういうものと全く違う環境教育というのが望まれるんだがね。

【篠田】自然観察会としての環境教育というのがあると思うんですよね。そういう発想による観察会ができるような勉強会だとか、まあ、みんなで考えることができればプロジェクトチームを協議会の中に作って、そんなマニュアルを作っていくとか、そんな方向づけをしないと取り残されますよ。

【天野】僕自身も頭を悩ませていますから。

【降幡】しょうがないからやれといっても、消化する力がないですよ。現場ではね。コンピュータもそうなんですけどね。

【篠田】僕が頼まれた全国リクレーション大会の環境教育者部会で大学クラスの先生が、うちも認定校で文部省から今年から環境教育をつくりなさいといわれたけど、授業なにやっていいか見当もつかないという具合だものね。

【佐藤】見当がつかない大きな理由のひとつが幅が広いということだろうね。テーマを絞り込めば自ずと道はできくと思うんだけどね。

【天野】学校教育の中でも環境教育はすごく大きすぎてね、総合教育なんですよ、あれはね。生涯教育に含んでいますからね。



ですから学校では教科で単純に割り切れない
ものですからね。それだけに困ってしまう。

【佐藤】テーマを絞り込めばどうですか。

【天野】この分野についてやっていくんだとい
うように、あらかじめやってしまえばいいん
です。だから、私たち自然観察指導員の協会の
ほうでも何かやっていけないと思いい
ますねえ。

【佐藤】環境教育がらみの観察会も大事なこ
とですが、これからの観察会でほかに何か、こ
ういう点を注意してやっていったらどうかとい
うことはないですか。

【柴田】まだ自然観察についての意識が薄い
ということで、自然観察会にみなさん出てくだ
さいということで、すごく一般の人に対して、サ
ービス精神旺盛でやってきたんだけど、その
へんはどうなんでしょう。これからは自然観察
会というのに対して、みなさん来てくださ
い来てくださいと言わなくても、来る時代じゃ
ないかという気がする。

【篠田】関心を持って来てもらえるような形を
こちらが作り上げないかね。

【柴田】そうそう。

【佐藤】やっぱり主張を持った観察会をやっ
ていくということなんですね。

その場合、自己反省は必要でしょうね。自分
のやり方がまずいから来ないというのを。

【篠田】棚に上げてね。ただ、入門編とか、
関心を持ってもらうためのイベント的な大きい
観察会というのは、年に何回かは、協会単位
とか県単位とか、いろんなものでしてもら
わないかんと思うね。ただそれをいかに育てて
いくかは個々の観察会の問題になってくると思
うけど。2通りの考え方でいけると、両方とも
同じ考え方ではやっていけない部分があると思
うね。

【佐藤】そのひとつが、湿原のシリーズ観察
会だと思うんですが、目的を持ったシリーズ観
察会を協会でやるのも大事だろうと気がするん
ですがね。

【水鳥】まあ、これからの自然観察会といっ
ても今までのことは大切であって、先ほど言葉に
あった身近な自然が見えなくて、何が日本だ、
何が世界だということで、そこがやっぱり基本
だし、参加者全員が楽しい、うきうきするよう
な、生きがいみたいなものを持てるような観察
会がやっぱり基本で、これまでどおり、これま
で以上に大切になってくる。

【佐藤】基本はそうでしょうね。

【篠田】それにしてももうちょっと指導員の質
をあげないと。

【青木】最後はそこにいってしまう。

【佐藤】痛感してるんですがね。特に、子供相
手の観察会をできる人がもう少し増えるとい
いんですが。

【篠田】小児科になるか。

【佐藤】結局子供相手は説明してる観察会
はできないものね。

研修会をやったらいいかなと思うけど、だ
れかい指導者いないかね。

【水鳥】西尾の伴先生が子供を引き連れてや
ってね、ほいで頼まれてやったときに、子供達
に木を蹴ってみろよと言って、子供達が蹴っ
てみた。するとカミキリムシが落ちてきたとい
って、そういう体験を子供達にさせて、そうい
う木をゆするとカミキリムシが落ちてくるん
て、それはびっくりするだろうね。

そういうことが、木を見てぱっと子供達にや
らせちゃうなんて僕なんかなかなかできない
だけだね。

【佐藤】発想の転換みたいなものですね。

それでは今日はどうもありがとうございました。
おもしろい意見が多く出たので、それをう
まくまとめて生かすことを考えていこうと思
います。



活動予定

- 8月 4(日) 9:30 大森湿地自然観察会
 10(土) 10:00 (協議会) 視察研修会<地下鉄・本郷駅集合>
 ~11(日) - 梅池自然園-姫川源流-居谷里湿原-
 11(日) 9:30 大高緑地-----
 10:00 岳見高原-----
 --<室内例会は休会>--
 24(土) 10:00 青少年公園-----
 25(日) 8:00 熱田の森-----
 19:00 相生山緑地----- (ナイト・ウォッチング)
 --<7月は休会でした>--
- 9月 1(日) 9:30 大森湿地-----
 10:00 (協議会) 研修会<名鉄瀬戸線・尾張旭駅集合>
 -水生植物の観察-
 8(日) 9:00 大高緑地-----
 10:00 岳見高原-----
 15(日・祝) 9:00 (名古屋支部主催) 猪高緑地-----
 13:30 室内例会<名東社協・第一集会室>
 -夏の自然観察結果発表会-
 (参加者は、1~2枚程度のレポートを20枚ほど用意)
 22(日) 8:00 熱田の森-----
 9:30 相生山緑地-----
 28(土) 10:00 青少年公園-----
 28(土) -:-- (研修会)<旭高原元気村・現地集合は、14:00 きらめき館前>
 ~29(日) -キャンプ研修-
 ※申込は、佐藤国彦(☎05617-3-5674)まで
- 10月 6(日) 9:30 大森八竜湿地-----
 -:-- (協)ふるさと自然観察会・葦毛湿原<事務局へ問合わせ>
 10(木・祝) -:-- (協)研修会-カヤツリグサ科植物の観察<----->
 12(土) 13:30 猪高緑地-----
 13(日) 9:30 大高緑地-----
 10:00 岳見高原-----
 16(水) 18:30 室内例会<未定>- (テーマ未定)
 20(日) 10:00-15:00 (県委託) 東山八事裏山-----<----->
 26(土) 10:00 青少年公園-----
 -:-- (協)研究会-市街地の自然観察<----->
 27(日) 8:00 熱田の森-----
 9:30 相生山-----

—自然観察会実施結果—

7/13 (土) 東浦地区 晴

テーマは「川の中の生き物」で、明徳寺川を利用する。一般参加者は50名位で、老幼男女集まり、盛大でした。タモ、バケツを持ち、靴、サンダル履きで川へ入った。

初めて川へ入る子、母さんが掬いバケツ持つ子、爺さんと都会っ子、オムツの見える子、共に川の中では元気に活躍し、楽しそうだった。名前調べでは退屈そうでした。

イシガメ・アカミミガメ・ナマズ・コイ・カムルチー・タイリクバラタナゴ・モツゴ・ブルーギル・アメリカザリガニ・スジエビ・モクズガニ・ヒメタニシ・シジミ・サカマキガイ・ヒメモノアラガイ等

〔伊藤、岩崎、加藤、竹内秀、原、降幡、村瀬、岩本、桑原、田中〕

7/14 (日) 大谷海岸 晴

知多・常滑観察会を大谷海岸で実施しました。常滑ケーブルTVが取材にきた。大谷海岸は知多半島では護岸がない所でしたが、最近防波堤が構築されていました。渚が後退し、幅が狭くなったのは残念です。

この日は、30度を越す暑さで、ケーブルTVの方も汗を流しながらの撮影でした。

アカニシ・ツメタガイ・カキ・サルボウガイ・アカガイ・シオフキ・キサゴ・アサリ・レイシガイ・イボニシ・カガミガイ・シマメノフネガイ・カモメガイ・ホトトギスガイ・ナギナタホオズキ・クロムシ・ミツクラゲ・ナマコ・イソガニ・イシガニ・ワカメ・ホンダワラ・アマモ等

〔相羽、加藤、中井、降幡、皆川、村瀬、山田〕

7/28 (月) 富木島大池 晴

トンボ観察会で東海市船島小学校へ集合

参加者が予想より多く、40名ばかり。市の職員と取材の中日新聞もいる。新川の堤を通り富木島大池まで約1kmを急ぐ。

大池は、今まで何回か行ったが、こんなに暑い時期は初めて。池を一周できずに引き返す時、カブトムシを見つける。

キイトトンボ・ベニイトトンボ・アジアイトトンボ・セスジイトトンボ・モノサシトンボ・ウチワヤンマ・シオカラトンボ・コフキトンボ・コシアキトンボ・ショウジョウトンボ・マイコアカネ・オニヤンマ。

ヤブキリ・ヒメミズカマキリ・コオイムシ・タイコウチ・タマムシ・スジエビ等観察した。

〔相羽、岩崎、石原、加藤、平松、降幡、村井、村瀬、吉川〕

阿久比町夏休み子供教室

8/ 1 (木) 晴

植物教室……中央公民館の回りを巡り、植物10種集めて、公民館で名前を調べる。参加者33名中3年生が21名で興味がなく、大変でした。講師の見本と首っ引きで調べて記名した。午後は押し花作り。

〔加藤、中井、降幡〕

8/ 2 (金) 晴

ビーチランドと川・干潟の生物……バスで移動、ビーチランドでイルカショーと水中ショー、海洋館の見学で、午後は山王川のカニと干潟の生物を学習した。

〔加藤、中井、降幡〕

8/ 3 (土) 晴

川の中の生物……殿越川を利用。ドジョウ・メダカ・カエル・モツゴ・ツボ・タイコウチ・ミズカマキリ・ゲンゴロウ・ガムシ・コオイムシ・マツモムシ・トビケラ・ミズムシ・ヤゴ等

〔加藤、中井、原、降幡〕

行 事 案 内

☆基礎研修会「水生植物の観察」(野外)

期日：平成8年9月1日(日) 10:00～昼

場所：志段味地区 (集合：名鉄瀬戸線尾張旭駅10:00)

講師：東 義巳

☆指導員研修会〔キャンプ研修〕

期日：平成8年9月28～29日(土日) 宿泊はバンガロー

場所：旭町旭高原(周辺の自然観察と星の観察)

現地集合：28日14:30 (地下鉄本郷駅から乗合せて出発)

☆研究会「古地図を見て観察①」(野外)

期日：平成8年10月10日(休) 9:30～昼

場所：尾張旭周辺 (集合：名鉄瀬戸線尾張旭駅9:30)

☆話題の地見学会「春日井市築水池周辺」

期日：平成8年10月26日(土) テーマ：公園づくりと自然

場所：春日井市築水池周辺 (集合：春日井市少年自然の家入口(正門)9:00)

☆基礎研修会「地形地質の観察を考える」(野外)

期日：平成8年11月4日(休) 9:30～昼

場所：音羽町(予定)

講師：高橋康夫

☆話題の地見学会「土岐市のシデコブシ」

期日：平成8年11月9日(土)

場所：岐阜県土岐市のシデコブシ自生地 (地下鉄本郷駅から乗合せて出発予定)

★問合せ先：いずれも佐藤 (☎05617-3-5674) まで

✪ 編集後記 ✪



我が家の庭にサルスベリが美しく咲いています。百日紅とも呼ばれるこの木は、花の期間が長いので、花の少ないこの時期には貴重です。

協議会では会員の皆様のために様々な行事を開催しています。今月は、5月に開かれました研究会の模様をお知らせしました。多くの会員が行事に参加されることを期待しています。

また、皆様の原稿もお待ちしています。(近藤)

＝ 目 次 ＝

鳴く虫の観察	1
これからの自然観察会について	3
支部だより	17
(名古屋、知多)	